

筑波大学の「今」を切りとる季刊広報誌

TSUKU COMM

TSUKUBA COMMUNICATIONS

【ツクコム】

vol.
40
2018 SUMMER



筑波大学
University of Tsukuba



04 「聴」永井裕久 教授

08 「TSUKUBA OBOG」垣内美都里 氏
10 「附属学校めぐり」筑波大学附属聴覚特別支援学校
12 「躍動 筑波大生」古川萌子さん／木村友輔さん
14 「Homeland」ロッシン・アンジェリカさん

16 TOPICS | 23 世界のトピラ | 24 リレーメッセージ



グローバルリーダーの条件

多様性の中で柔軟に行動できる人材を育てる



ビジネスサイエンス系
永井裕久
教授

Hirohisa Nagai

グローバル化が進む現代社会では、企業などの組織の活動も多国籍に広がっていきます。そんな中で求められるのが、海外でリーダーとして活躍できる人材。しかし、日本で成果を上げた人が、必ずしも海外でも同じようにパフォーマンスを発揮できるわけではありません。組織行動論に基づいた実証研究によりグローバルリーダーの資質を定義し、それに則したリーダーシップを効果的に身につけるための人材育成プログラムを開発・実践しています。

■スペシャリストとしてのグローバルリーダー

産業能率大学が2017年に実施した調査によると、日本企業の新入社員の6割が、海外で働くことを望まないそうです。しかし企業自体はグローバル化の流れに逆らうことはできません。そして、環境や文化の異なる土地でビジネスを成功させるには、その原動力となる優れたリーダーが不可欠です。

企業が海外に進出する際、国内でリーダー実績のある人が、現地で指揮を執るのが当然

のように思われます。しかし国外に出たとたん、それまでの常識や慣習が通用しない状況に直面することは少なくありません。その時に臨機応変に、対応できるかが大切です。日本でも組織のトップを外部から登用する例が増えています。社内の定期的な人事異動と年功序列により育成されたマネージャーにはない資質を備えたトップリーダーが求められていることの証といえるでしょう。グローバルリーダーはスペシャリスト。その育成には専用のプログラムが必要なのです。

■リーダーシップを学術的に捉える

国内と海外の一番の違いは多様性です。リーダーは、文化や習慣、考え方の異なる人々から成る組織をマネジメントし、それぞれの能力を見極め適材適所で活用しなくてはなりません。想定外のトラブルにも柔軟に対応し、目標に向かっていく精神的なタフさも必要です。大切なのは、不確定要素の多い環境の中で、柔軟に考え、やりぬく力。これは、従来の日本型の画一的なエリート像とは異なるものです。



グローバルリーダーズ・プログラム

本学附属学校教育局は、文部科学省スーパーグローバルハイスクール事業の全国123指定校、56アソシエイトの幹事校管理機関としての管理業務に加え、中高生向けの海外研修を含むグローバルリーダーズ・プログラムを研究開発・実施しています。これまでに、筑波-ブリティッシュ・コロンビア大学(カナダ)、筑波-香港大学、ジュニアの各プログラムを開講し、今夏は、筑波-ハワイ大学プログラムを新設します。
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/glp/>

PROFILE

ながいひろひさ

博士(商学・慶應義塾大学)

現在、ビジネスサイエンス系教授(国際経営プロフェッショナル専攻)、附属学校教育局特命補佐。

クランフィールド経営大学院、北京大学光華管理学院、ハワイ大学経営大学院、フィリピン大学労務関係研究所、イズミル経済大学の客員教授を歴任。専門は組織行動論。「異文化組織における人間の意識や行動」を実証的に研究する研究課題に取り組む。グローバル人材開発に関する著書、論文多数。

このような人材像は学術的な実証研究から導き出されています。すでにグローバルリーダーとして高い評価を得ている人々を対象にした調査結果から、異文化環境で直面した問題の解決のために有用なコンピテンシー(適性や行動パターン)には、ある共通性が見えてきます。

これらのコンピテンシーは、4つの次元:S(Search 問題発見)、P(Plan 解決策立案)、D(Do 実行)、L(Learn 学習)にまとめることができます。さらに、この4つの次元を効果的に実行するためには、「メタ認知」、すなわち自分の置かれている状況や行動を客観的に認識する能力が不可欠です。優れたリーダーは無意識のうちにこれらを繰り返し実践し、経験値を高めながら、多様性や変化への対応力や、探求的・自律的に問題解決に臨む姿勢を獲得しています。

■グローバルリーダーの育て方

SPDLサイクルやメタ認知といったコンピテンシーは、机上で学ぶものではなく、半分は生まれながらのパーソナリティ、もう半分は環境によって形成されると言われています。従って、グローバルリーダー育成の鍵は、日常的にグローバルな環境に身を置き、実践的な訓練を積んで、意識的にこれらのコンピテンシーを身につけることです。

日本では、そのようなプログラムを提供するのは大学院、いわゆるビジネススクールです。本学の社会人大学院で開設している国際経営プロフェッショナル専攻もその一つ。約30名の社会人学生の3分の1程度、教員の過半数が外国人で、授業も英語で行われます。さらに海外に10校ほどある提携校へ短期留学して授業に参加したり、シリコンバレーの企業など

を訪れ、現地の人々とのディスカッションを通して、グローバル感覚を養います。修了生の多くが、実際に海外赴任をしたり、転職してキャリアアップを図るなど、着実にグローバルリーダーへの道を歩んでいます。

■早期教育のススメ

しかしながら、社会人になって初めてこのような教育の必要性に直面するというのは、学校教育にも課題がありそうです。確かに現状の学校教育には、多様性やグローバル感覚を学ぶカリキュラムは含まれていません。SGH(Super Global Highschool)指定校でも、グローバル活動の多くは総合学習や課外活動に位置付けられており、グローバル対応能力の学習時間は十分とはいえません。

高校生対象に調査をしたところ、SGH指定

校でグローバル活動のカリキュラムを主体的に選択する生徒は、そうでない生徒に比べて海外への意識が格段に高く、卒業までにその差は顕著に広がります。多くの大学がグローバル教育に力を入れていますが、それでは遅いのです。もっと早い段階で海外交流や体験活動の機会を提供することが求められます。

そこで近年は、本学附属学校教育局特命補佐として、高校生向け「グローバルリーダーズ・プログラム」の開発に注力しています。北米やアジアの大学と協働し、英文のアカデミックレポートの書き方やプレゼンテーション技法を学んでから、海外の大学キャンパスで研修し、その成果を英語で発表するコースです。研修当初はたどたどしい英語でディスカッションしていた生徒たちが、帰国後には堂々とプレゼンテーションできるまでに成長します。

■オリジナリティーを評価する

このようなプログラムを全ての高校生に受講してもらうことは無理だとしても、資質や意欲のある生徒がチャレンジすれば、その機会が得られるような環境整備は進めるべきでしょう。例えば、国立大学の附属高校として、各都道府県に1校ずつインターナショナルスクールを設置すれば、通学や学費面でも次世代グローバル教育はずいぶん変わるはずです。

インターナショナルスクールはもとも、帰国子女や一時的に日本に赴任している外国人の子弟のための学校です。教育方針も日本の学校とはかなり異なり、正しい答えよりも自分の考えをしっかりと述べること、オリジナリティーが評価されます。一人ひとりの個性、すなわち多様性を尊重するということです。

そこで問われるのは教育メソッドです。模範解

答とは別の軸でさまざまな個性を適切に評価し、多様性に富んだ教室をマネジメントすることが求められますから、教員養成においても新しいプログラムが必要です。その一つとして本学は、平成29年度、30年度の文部科学省「新時代のための国際協働プログラム」で採択された事業により、高校教員のための研修プログラムの開発に着手しました。海外の大学と協働して、日本の高校用に英語による授業案を作成し、それを実際に高校生向けの海外研修プログラムとして開講する、というサイクルモデルの実践を進めています。

雇用が流動化し、転職や起業する生き方も許容される社会になってきました。その先にあるのが多様性や変化にあふれた世界。グローバルリーダー育成は一層、重要性を増しています。



株式会社ぐるなび 取締役 執行役員
管理本部 法務コンプライアンス室長
ダイバーシティ推進室長

垣内美都里 氏

ダイバーシティをライフワークに

ダイバーシティの重要性は誰もが認めるところですが、女性活躍など、その捉え方はごく一部にとどまっているのも事実です。垣内美都里さんは、日本の食文化を海外に発信するという視点から、真に多様性を理解する人材の育成を進めています。

食の情報発信をする企業にとって、ダイバーシティにはどのような意義があるのでしょうか。

飲食店の情報サイトは、海外からの観光客などにも利用していただくものです。和食は世界遺産にもなっていますし、日本には世界中の料理が集まっていて、しかもそれぞれのレベルが高い。それほど素晴らしい日本の食文化なのに、世界に向けての発信はいまひとつだと感じます。それには、外国語対応だけでなく、文化や

習慣の違いなども理解した上で、日本の良さをアピールすることが大切です。ネット検索も、方法や目的が多様化していて、求められる情報の種類や見せ方にも工夫を凝らさなくてはなりません。ですから、外国人や老若男女、さまざまな人の視点を取り入れる、つまりダイバーシティを広げることが、より良いサービスの提供につながります。少子高齢化で国内市場が縮小しても、そうして食を楽しむ目的で日本を訪れる人が増えれば、日本の食文化の継承はもとより、経済成長ももたらします。

ダイバーシティ推進はトップのコミットメントが鍵です。役員として、日頃からできるだけ多くの社員とコミュニケーションを図って課題を見つけ、それらを行動目標として業績評価や人事システムに組み込んで、ダイバーシティが自分ごとになるよう、組織全体の意識改革に努めています。

ダイバーシティに取り組むようになったきっかけは何ですか。

筑波大では法律、特に商法を専攻しました。女子学生の就職は厳しい時代でしたから、企業で役立つことを学ぼうと考えたんです。当時の就活は先輩リクルーターの採用活動が一番の頼りで、日産自動車に就職していた先輩女性が声をかけてくれました。入社して法務部に配属されたのもラッキーだったと思います。

その頃の日産は典型的な日本型企业でしたが、バブル期を過ぎて経営状態が悪化すると、フランスから新しい経営陣がやってきて、グローバル化という劇的な変化の波にさらされました。社内公用語が英語になり、異なる価値観が導入され、優れた提案でも日本流のアピール方法では国際社会で評価されないということを感じました。大変でしたが、ずいぶん鍛えられましたね。

法務担当としてグローバル体制の構築に関わる中で、徹底的なダイバーシティ推進も大きなテーマでした。女性活躍から始まり、真に多様性を受け入れる方向へとフェーズを移してい

きました。ダイバーシティを理解する人こそがグローバルに活躍できるということですね。これからも、ライフワークとして、そういう人材を育てる一翼を担っていきたいと思っています。

学生生活を振り返って、ご自身のキャリアの糧となるような出来事や経験はありますか。

受験の時点で学部を決めてしまいたくなくて、筑波大を志望しました。田舎にいと将来の進路に全くイメージがわかないし、いろいろ見てから決めたくったんです。都会に出たい気持ちもありました。インターネットもオープンキャンパスもない時代で、つくばに行ったのは入試が初めてです。今思えばかなりの冒険ですが、好奇心の方が圧倒的に強かったですね。

つくばは想像していたような都会ではなかったものの、多くのカルチャーショックがありました。まずは風景。どこまでも続く平野に筑波山だけという眺めは、海や山々に囲まれた故郷とは大違いで驚きました。でも何より驚いたのが、分野も個性もとにかく千差万別な学生たちです。田舎から出てきた自分にはびっくりするような人もいましたが、自分とは全く違う人たちと触れ合うのは宿舍生活ならではの体験です。体育の授業で柔道をやることになってしまって、柔道に男女の差はない、なんて言われて、男子に何度も投げ飛ばされたりもしましたが、これも、ダイバーシティの原点のような経験の連続でしたね。

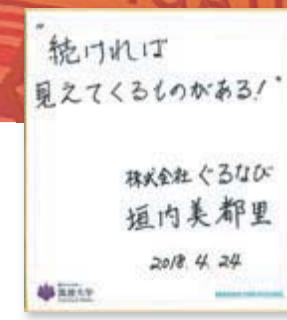
また、つくばでの生活には車が必需品でし

た。免許を取り自分で運転するようになると楽しくて、友人と一緒に夜の筑波山などあちこちドライブして回りました。そもそもの就職先に自動車会社を選んだのには、そんなことも影響したように思います。

現在の筑波大や学生たちへのメッセージを。

企業もまだまだですが、日本の学問や研究の世界は特に、ダイバーシティが遅れていると思います。女性や外国人も少ないですし、支援が不十分で諦めてしまったり、他を犠牲にして頑張ったりと、働き方にも古い体質が残っています。リケジョが注目されていますが、どんな人や分野でも、なりたいたいと思えるようなロールモデルがいなければ後が続きません。簡単にはいかないでしょうが、このままでは国際的に遅れをとってしまいます。ダイバーシティは眉間にしわを寄せながらやることではありませんから、明るく楽しく変えていけるといいですね。

学生たちには、とにかくグローバルな視点を持つこと。内向き、安定志向ではこれからの社会を維持できません。若くてまだ心が柔らかいうちほど、異なる文化や環境を受け入れることができます。留学生と積極的に交流したり、留学でも旅行でも、言葉がわからなくても、怖がらずにどんどん国外に出て、自分たちの知らない世界が溢れていることを知ってもらいたい。そうすれば必ず何か気持ちが動くはずですよ。



PROFILE かきうちみどり

1965年 愛媛県生まれ
1988年 筑波大学第一学群社会学類卒業
同年、日産自動車株式会社入社。法務室にて北米、アジア、国内の各種法務業務に従事。軽自動車の合弁会社設立やグローバル法務体制の構築等に携わる。2014年7月に株式会社ぐるなびに入社。管理本部ダイバーシティ推進室長、法務コンプライアンス室長を兼務。法務業務全般、並びにダイバーシティの推進役として女性のキャリア支援や多様な人材が活躍できる仕組みづくりに取り組んでいる。

附属学校 めぐり

互いをわかり合うことから 始まる国際交流

筑波大学には11の附属学校があり、それぞれの分野でわが国の教育をリードしています。各学校のユニークな先生や授業、行事などの活動を紹介します。

筑波大学附属聴覚特別支援学校



■国際的な視野を育てる

インターネットを通じて交流してきた韓国の友人たちと、初めて直接会う日。顔見知りではあるけれど、いつもパソコン画面の向こう側にいた相手ガリアルに目の前に現れるというのは、やっぱりなんだか不思議な感じなのでしょう。やや落ち着いた雰囲気の中、調印式の会場にソウル聾学校の教員・生徒たちが到着すると、中学部の教員と生徒たちは大きな拍手で迎えました。

今回締結する国際交流協定は、本学附属聴覚特別支援学校とソウル聾学校との間で

3年前から続けてきた生徒間の交流活動を、5年間延長するためのものです。日韓を代表する特別支援学校が、それぞれ培ってきた教育の専門知識やノウハウを共有することには大きな意義があります。また、両校とも国際的な視野を育む教育に力を入れており、今後、各国の特別支援学校と幅広く連携を築いていくための、足がかりにもなるものです。

■心づくしの交流

両校の校長挨拶と調印のセレモニー、そして学校紹介、生徒代表の挨拶と、式は肅々と

進んでいきます。その内容はどれも、互いの生徒たちに向けた歓迎と期待のメッセージ。スクリーンには日本語と韓国語での表示のほか、手話と音声での逐次通訳も行われます。互いの学校への敬意や、障害の程度の異なる生徒たちに対する配慮というだけでなく、この交流協定を、真に役立つものにしてほしいという思いが伝わってきます。

調印式のあと、韓国の生徒たちによるパフォーマンスが披露されました。コミカルな動きでリングをつないだりはずしたりするマジック、テコンドーの型をモチーフにした演技、それにダンスや歌、一生懸命に表現してくれました。



国立ソウル聾学校との国際交流協定

2008・2009年、特別支援教育における美術教育の教材開発を目的に、本学附属聴覚特別支援学校の教員が国立ソウル聾学校(韓国)を訪問したことから、両校の教員間交流がスタートした。これが生徒間のオンライン交流へと発展し、2015年、両校は国際交流協定を締結した。2018年5月31日にソウル聾学校の教員・生徒たち26名が初めて来校し、この活動をさらに5年間延長するための協定調印式および交流会が行われた。

みんな緊張気味の様子でしたが、韓国や自分たちのことを知ってもらおうと、この日のために練習を重ねてきたことが感じられる温かいパフォーマンスで、会場は歓声に包まれました。

■みるみる打ち解けて

その後は、教室へ移動して生徒同士の交流会です。4つのグループに分かれて、折り紙で手裏剣や鳥などを作ります。それほど難しい作業ではないものの、2枚を組み合わせた、動かすことのできる構造などもあり、とこころでわかりにくい部分が出てきます。最初は手順書を見ながら一人ひとり取り組んでいましたが、だんだんと、教え合ったり、出来上がった作品を見せ合ったりするようになっていきます。

手話には日本と韓国とで共通の表現もあります。とはいえ、それだけで十分な意思疎通とはい

きません。でもそこは、様々な壁を乗り越えてコミュニケーションを図ることに長けた生徒たち。スマホを使ってその場で翻訳した互いの言葉や、英語での筆談なども織り交ぜて、いつの間にか折り紙以外のことにも話が弾んでいます。

クライマックスは、各自が折り紙で作った力士で戦う紙相撲大会です。まずグループごとに予選を行い代表選手を選びました。決勝トーナメントに出場したのは、日本と韓国から2名ずつ。小さな土俵のまわりに集まってみんなで声援をおくりします。白熱戦の末、韓国の女子生徒が優勝し、はにかみながらも堂々のスピーチに、改めて拍手が湧きました。

韓国の生徒代表で高校2年のパク・ジュンピンさんは、「パソコン越しの交流の時は堅苦しい感じもあったけれど、直接会うと、気楽にいろいろなことが表現できた。こういう機会が増えてほしい」と、話してくれました。



■もっと知り合いたい!

盛り上がっている交流会も、そろそろお別れの時間です。プレゼント交換をしたり、写真を撮り合ったり、みんなとても名残惜しそう。なかなか教室を離れることができません。校門で、双方の教員・生徒が揃った最後の記念撮影をして、ようやく見送りました。

交流会の司会として大活躍だった、中学部2年の岸田朋花さんと大和田舞香さんは、「準備は大変だったけれど、一緒に活動ができてとてもうれしい。今度は自分たちが韓国へ行って、どんなふうに勉強しているのか見てみたい」「言葉がわからなくても、身振り手振りで通じることが楽しかった。これからお互いのことをもっと教え合って、わかり合いたい」と、それぞれ充実した表情で、交流会を振り返りました。

言葉が通じれば、コミュニケーションが成立するわけではありません。今日1日を通して、相手のことをよく知りたい、親しくなりたい、その気持ちが交流の原点であることに気付かせてくれる場面がたくさんありました。そういう気持ちを抱いたこと自体が、生徒たちにとっては大きな成長。楽しい思い出とともに、国際人としての第一歩を踏み出した日となりました。



つながりを深め、広げていく

佐坂佳晃 中学部主事

調印式での校長挨拶は、互いを高く評価しつつ、今後の更なる交流の発展を願ったものでした。その後に行われたソウル聾学校の生徒によるパフォーマンスはどれも見事で、とりわけリングを使ったマジックは、プロのマジシャンと見紛うほどの腕前で、会場が一気に盛り上がりました。

今回、交流学習を行った2年生は、昨年度、ソウル聾学校とのオンラインでの交流学習を経験して

おり、互いに打ち解けるのに時間はかかりませんでした。昼食後の自由時間には、積極的に校舎内の案内をしたり、最後の見送りでは、抱き合っただけを惜しんだり、これまでのオンライン交流では為し得ない深い交流を見ることができました。

今後もオンラインを中心に交流を行い、将来的には教科学習に関する共同研究も視野に入れていきたいと考えています。



躍動 筑波 大生

役立つ人になる

2017年の全日本ライフセービング種目別選手権で、サーフスキー3位、2018年の全日本ライフセービング・プール競技選手権でSERC2位。毎年7月から8月の海水浴シーズンには、銚田市大竹海岸でライフセーバーとして活動する。中央図書館2階の学習室が好き。海から帰ってきて勉強モードに切り替えられる場所。

HOIKO FURUKAWA

数理工学系研究科(博士前期課程)
物性・分子工学専攻1年

古川 萌子 さん ライフセービング部

ライフセービングは、水辺の事故を未然に防ぐ活動で、海水浴シーズンには浜辺のパトロールや救助を行う。また、日頃のトレーニングで培った救助技術を競うライフセービング競技会も開かれている。

古川萌子さんは、大学入学後、新しいことにチャレンジしようとライフセービング部に入部した。「自然の中で過ごせて、スポーツもできて、社会貢献もできる。ここならやりたいことが全部できる」。初めは、波を越えようにも道具も扱えなければ、泳ぐのも怖く、なす術がなかった

が、レスキューボード、スイム、サーフスキー、ビーチランなど、競技会に向けて練習をするうちに、徐々に沖に出られるようになった。

本学のライフセービング部は、1992年に国立大で初めて誕生した。夏は茨城県銚田市の大竹海岸を拠点に監視救助業務を行っている。銚田市や警察署と連携し、地元のライフセービングクラブの一員として、大竹海岸銚田海水浴場の19年連続死亡事故ゼロに貢献してきた。古川さんにとってもパトロールは大切な活動。ビーチにいる大勢の人それぞれに目を配り、危険を察知したら、相手を不快にしないように気を付けながら、注意を促す。迷子の捜索やケガ人の搬送などでは、普通の生活で聞くととは違った重みのある「ありがとう」の言葉もらい、清々しい気持ちになる。

ライフセービング技術が高ければ、その分、救助に行ける範囲が広がる。短い海水浴シーズンのパトロールに備えて、年間を通じて陸上練習のほ

か、週末には大竹海岸で水上トレーニングに打ち込む。その努力が実り、2017年の全日本ライフセービング種目別選手権で、古川さんは表彰台に立った。

大学院受験や卒業研究との両立は容易ではなかった。しかし先輩たちが同じように乗り越えてきたのに、自分にできないわけではない信じ、練習後も24時まで図書館で勉強した。大学院では、燃料電池の酸素還元触媒の研究をしている。燃料電池用触媒として白金に代わる活性を示す非金属分子の探究など、百万分の1ミリの世界が暮らしに役立つ材料につながっていると思うとワクワクする。将来は「どんな職業に就いても、役に立てる人になりたい」。大学院1年生の夏も、浜に立つ。



オーストラリア・ゴールドコーストでのパトロール



後輩にひと言
筑波大ではいろんな人に出会えて、高校時代よりずっと世界が広がられると思います。勉強と両立できるかなって不安は努力でなんでも乗り越えます。戻込みせず、思い切ったチャレンジしてください



躍動 筑波 大生

時間をかけて学ぶ

学内の起業家教育プログラムへの参加をきっかけに、サポートレーニング共有サイトを立ちあげ、国内のビジネスコンテストで多数受賞。2016年、大学2年の秋に株式会社シアトレを設立、2018年4月、世界52カ国から学生起業家が集うコンクールEO GSEAに日本代表として出場。常にノートを携帯し、アイデアや気になったことはとにかく書き留める。

YUSUKE KIMURA

体育専門学群3年 木村友輔 さん 株式会社シアトレ代表

2018年4月、木村友輔さんは、学生起業家を対象としたコンペティション「EO GSEA」の世界大会に、日本代表として参加した。この大会は国際的な経営者団体「Entrepreneurs' Organization」の主催で行われる。世界52カ国から選ばれた同世代の参加者と、それぞれが描くビジネスのビジョンを語り合う中で、地球規模でマーケットを捉え、貧困や環境といった世界的な課題を解決しようとしている目的意識の高さに、木村さんはレベルの違いを痛感した。「国内のビジネスコンテストで評価されているうちに、天狗になっていたんでしょうね。視野の広さ、視座の高さ、技術の確かさ、僕の鼻はことごとくへし折られました。でも心は折れなかった。もっと向上したい」。世界大会のファイナリスト

後輩にひと言
マジリテイから外れることを恐れます、好きなことを突き詰めてほしい。自分と向き合える大学時代、考えたいだけじゃなくて動き始めてください



にはなれなかったが、起業家としてのモチベーションを高める好機となった。

プロサッカー選手を目指していた木村さんは、高校1年生の時に大ケガに見舞われた。治療やリハビリが思うように進まず焦っていたときに、稲盛和夫著の『生き方』を読んで経営者に憧れるようになった。当時のアイデアノートには、スポーツに関連した新しいビジネスを立ち上げたい、と書いてある。体育・スポーツを存分に学べる筑波大に進学したいと考えるようになったのはこの頃だ。

大学1年の時、蹴球部の活動で小学生を指導する際、練習メニューづくりに悩んだ経験をもとに、トレーニング情報を共有するサイトのプランを学内の起業家教育講座で発表した。これにメンターのOB起業家やシステム開発に詳しい学生が賛同してくれた。起業の資金調達にクラウドファンディングを紹介してくれたのも、別の授業で知り合ったOBだった。多くの人の助

けを得て、想像以上のスピードで起業を果たした。周囲を巻き込む力は木村さんの大きな強みだ。

昨年度1年間、事業に専念したいと大学を休学した。復学した今、「時間をかけて学ぶということがいかに贅沢か。立ち止まって、考えを深めるために、大切に過ごしたい」という。GSEAを終えて、表面的な課題の奥にある、本質的な問題を見極めたいと考えるようになった。自らのステップアップと次のビジネスに向けて、木村さんは貪欲に学ぶ。



EO GSEAに参加した各国のファイナリストと

 ブラジル連邦共和国

Homeland

筑波大学には、100を超える国から、約3千人の留学生が訪れています。このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、食べ物など、多岐にわたって紹介していただきます。

留学生が輝く大学に

●「自転車で20分」圏内の豊かな日常

ブラジルの南部パラナ州クリチバで生まれ、アメリカ、イギリス、日本といろいろなところに住みました。その中で、つくばが一番、性に合っています。自転車で20分の範囲が、ほぼ私の生活圏。卒業研究のほか、留学生支援や起業に向けた勉強会、アルバイトなど、いつもたくさんの荷物を抱えて動き回っているの、効率的に移動できる環境は、今の私にピッタリです。それでいて、大学に近いアパートでも比較的静かで、木々がうまくキャンパスとの境界になっているので、オンとオフが切り替えられます。

私は人間学群で社会心理学を学んでいます。課外活動として、大学の学生交流課が開設している「Ask Us Desk」で、履修申請に関することや、生活の困りごとなど留学生からの相談を受けたり、学外では、留学生の起業を支援する活動をしています。私自身も、起業家育成セミナー「筑波クリエイティブ・キャンパス」や次世代アントレプレナー育成事業「Global Tech

EDGE NEXT」といった、大学のプログラムを活用して、起業の準備をしています。

●日本からブラジルへ

広島県呉市の公立小学校に通っていたので、自然に日本語が話せるようになりました。呉市の中でも私の住んでいた広町はのどかなところでした。小さな商店街や、みんなと遊んだ路地、教会など、今でもよく覚えています。

しばらくして日本を離れ、ブラジルに戻ったのですが、タイミングが悪かったこともあって現地の高校に編入せず、ブラジルの大学入学認定試験を受けて、パラナ連邦大学(UFPR)の芸術学部に進学しました。

UFPRは、故郷クリチバにあります。平均気温がおよそ17.5℃、緩やかに寒暖の差があって南米でも比較的過ごしやすい都市です。イタリア系とウクライナ系の移民がほとんどを占め、町の雰囲気からブラジルのヨーロッパとも言われています。

UFPRのキャンパスは筑波大とは違って、市内に建物が点在しています。クリチバの中心サントスアンドラ広場にある校舎は、1912年に建てられた、ブラジルの大学の中で最も古い建物です。ブラジルでは通りに、歴史的に重要な日付や人の名が付けられることが多く、UFPRを起点とした歩行者専用の大通りは「11月15日通り(キンゼ・デ・ノベンプロ)」と言います。1889年のこの日にブラジルが君主制から共和制への移行を宣言したことから、国の記念日にも制定されています。このあたりは、ポルトガル植民地時代の建物や軍の停留地だった場所が社屋や商業施設として使われていたり、昔の駅舎がショッピングモールになったりして、とても趣があります。

●学びを求めて、再び日本へ

UFPRは日本の国立大学にあたり、本来なら学費はかからないのですが、工学、医学、法律などもともとある学部とは違って、新しくス



Rossin C. Angelica

ロッシン・アンジェリカさん

所属 | 人間学群心理学類4年



スタートばかりの芸術学部は、教育省の認可が間に合わず、十分に支援されませんでした。その不満から、教職員や学生が度々ストライキを起こし、1年半の間に2度も、数ヶ月間に渡って授業がないという状態。奨学金もストップされてしまい、アルバイトをしようと思っても、いつストが終わるかわからず、それもままなりません。困っていたところ、母が文部科学省の実施する国費留学で日本へ進学してはどうかと情報を集めてくれました。そこで芸術分野で留学申請をしたのですが、授業がなかったわけですから当然、合格できませんでした。

それでもいったん決めた日本行きを諦められず、芸術よりも募集の多い分野に転向しようと考えました。その頃、私はアメリカのドラマシリーズに影響を受けて、心理学に興味を持っていたので、同じクリチバにある私立大学で1年間学び、今度は心理学で応募して合格でき、ようやく日本への道が拓けました。その年の学部進学を対象とした国費留学は21歳という年齢制限があり、ギリギリのチャンスでした。

留学初年度は準備期間として、大阪大で日本語と日本文化を学びました。秋口から年明けにかけて次年度からの進学先を決めるための準備が始まります。大阪大での成績や態度、学問への関心や興味などを元に、担当教員と相談しながら、国立大学から7校を選び、文科省へ願書を提出しました。都会には暮らしたくないと思っていましたので、筑波大が受験先に決まったときは、ほっとしました。筑波大の心理学分野は対象領域が広く、優れた先生がたくさんいらっしゃるの、私の求める勉強ができると思いました。

●留学生支援をソーシャルビジネスに

筑波大入学後、留学生ならではのさまざまな壁を越えてきたことや、日本語ができるため他の留学生をサポートする機会が多かったことから、異文化適応に関する社会心理学に関心が向いていきました。卒業研究は、実際に、筑波大の留学生が大学での生活に適応するため

に、既存の異文化適応学習モデルが有効かどうかを検証しようと取り組んでいます。

卒業後は大学院への進学を考えています。大学ごとの支援システムの違いや、留学生として過ごし、考えたことが、私の中で具体的なアイデアになりそうですが、それにはもう少し勉強が必要です。そして将来、大学の留学生支援システムをビジネスとして提供したいと思っています。

筑波大は私にとって、子どもの頃にイメージしていた大学そのもの。いろいろな人や学問が一つのキャンパスに集まっています。でもその分、留学生には、手続きがわかりにくかったり、情報が一元化されていなかったりと不便を感じる場面もたくさんあります。世界中からつくばを目指して来る人たちのために、改善できることを見つけ、本気でそれに取り組んでいきたいです。



学生同士なので、なんでも質問ができるのがAsk Us Deskの魅力です



留学生と日本企業をつなぐ拠点「グローバル・インキュベーション・カフェ ピーチ」では、セミナーや交流会など企画運営しています



1912年に建てられたパラナ連邦大学の外観。数年前に真っ白に塗り替えられました。Photo © Agencia Paraná Turismo



旧市街地にあるオルデン広場は「馬の水のみ場」が目印。この辺りにはポルトガル植民地時代の建物が残っています。Photo © Agencia Paraná Turismo



11月15日通りに面したHSBC銀行ビルは、毎年クリスマスに「ナタウ HSBC」というクリスマスショーが行われます。Photo © Agencia Paraná Turismo

式典

入学おめでとう!



4月6日、大学会館講堂において、平成30年度の入学式を挙りました。学群生2,176人、編入学生96人および医療科教員養成施設入学生16人、大学院生2,407人が、本学での新たな一歩を踏み出しました。

永田恭介学長は祝辞で、やがて世界に飛び出し、人と地球の未来を切り拓く先導者となるために、幅広い学識と深い専門力を身につける努力を惜しまないようにと、新入生を鼓舞しました。



スイスオリンピック協会と事前キャンプ基本合意書を締結



基本合意書締結式にて。左からつくば市 五十嵐市長、本学 永田学長、スイスオリンピック協会ラルフ・シュトゥグリー東京2020ディレクター、茨城県 大井川知事



IOC トーマス・バッハ会長(左)

スイス・ローザンヌにおいて、スイスオリンピック協会、本学、茨城県、つくば市の4者による2020年東京オリンピックに向けたスイスオリンピック選手団の事前キャンプに関する基本合意書が締結されました。

スイスオリンピック協会は、この合意書に基づ

き、本学のトレーニング施設や専門性の高いフィジカルケアを活用し、柔道、陸上競技、体操競技チームのキャンプ実施を決定しました。今後、他の競技についての検討と、スケジュールや経費等の調整をしていきます。

また同日、永田恭介学長らはローザンヌにある

国際オリンピック委員会 (IOC) 本部にて、IOC 会長のトーマス・バッハ氏を表敬訪問し、オリンピック・ムーブメントやアンチ・ドーピングについて意見交換しました。バッハ氏には、2016年10月に本学から筑波大学名誉博士号を授与しています。

学生の活躍

人間総合科学研究科の山内宏志さんが、2018 FIFAワールドカップ ロシア大会 審判団に選出



6月14日から7月15日に開催される、サッカーの世界大会、2018 FIFAワールドカップ ロシア大会の審判団に、人間総合科学研究科(3年制博士課程)大学体育スポーツ高度化共同専攻2年の山内宏志さんと、体育専門学群卒業生の佐藤隆治さんが、それぞれ副審、主審として選ばれました。

ワールドカップの審判員は主審35人、副審62人、ビデオ・アシスタント・レフェリー13人を含め110人で、日本からは山内さんら3人が選出されています。

山内さんは、本学で学びながら国際基督教大学では教養学部の講師として勤務、またプロフェッショナルレフェリーとしてJリーグや国際試合で審判をしています。

審判もトレーニングは欠かせません。仕事と研究に加えて、コンディションの維持と向上のための時間を確保することには苦勞していますが、「教育者でありながら、学習者・研究者・実践者であることは、広い視野を得ながら、創造的かつ現実的でいられるので非常に有意義」と、職業人と学生を両立していることに魅力を感じています。

今回のワールドカップについて、山内さんは、「どの試合を担当できるかはまだ分かりませんが、身体的にも精神的にも最善の準備をしたいと思います。選手が最高のプレーをできるように、日本の審判団の一員としてベストを尽くします」と抱負を述べました。

山内宏志さん(左)と佐藤隆治さん(右)「夢の舞台に、副審として参加できることを誇らしく思っています。筑波大OBの佐藤隆治さんと一緒というのも喜ばしいです」



8月4日(土)、8月5日(日)、8月11日(土・祝)に、受験生のための本学説明会を開催します。カリキュラムや卒業後の進路についての説明、模擬授業など、趣向を凝らして各学群・学類の魅力を紹介します。「学類・専門学群説明会」では、授業や研究のこと、普段の生活や受験体験などを学生に聞くこともできます。

また「障害学生支援についての説明会・相談コーナー」や「受験相談コーナー」を設けるほか、「大学概要説明」、研究施設や学生宿舎などの「施設見学」も行います。

学類・専門学群説明会 要事前申込
(1日1学類のみ) 生徒のみ

8月4日(土) 10:00~16:30

- 人間学群 教育学類・心理学類・障害科学類
- 生命環境学群 生物学類 ●生命環境学群 地球学類
- 理工学群 社会学類 ●情報学群 情報メディア創成学類 ●医学群 看護学類
- 芸術専門学群

8月5日(日) 10:00~16:30

- 人文・文化学群 比較文化学類 ●社会・国際学群 社会学類 ●社会・国際学群 国際総合学類
- 生命資源学群 生物資源学類 ●理工学群 工学システム学類 ●情報学群 知識情報・図書館学類 ●医学群 医療科学類 ●体育専門学群

8月11日(土・祝) 10:00~16:30

- 人文・文化学群 人文学類 ●人文・文化学群 日本語・日本文化学類 ●理工学群 数学類
- 理工学群 物理学類 ●理工学群 化学類
- 理工学群 応用理工学類 ●情報学群 情報科学類 ●医学群 医学類

障害学生支援についての説明会・相談コーナー 要事前申込

8月4日(土) 15:30~17:00

本学の障害学生支援の概要説明や、障害のある学生によるキャンパスライフレポートのほか、障害に応じた個別相談コーナーを設定します。

受験相談コーナー 申込不要

期間中 10:00~16:30

本学教員による個別の受験相談を実施します。学類・専門学群の説明会に参加しない生徒のほか、保護者や付添者、進路指導担当の先生方もご利用いただけます。

大学概要説明 申込不要 先着順
生徒/保護者/付添者/教師

8月4日 13:00~13:50

8月5日、11日 10:00~10:50、13:00~13:50
筑波大学の概要(入試改革状況、入学試験、教育内容、学生生活、進路・就職等)を説明します。



施設見学 申込不要

生徒/保護者/付添者/教師

つくば機能植物イノベーション研究センター(次世代農業研究部門)

期間中 14:30~16:30

農場事務窓口で受付後、指定した区域

生存ダイナミクス研究センター

期間中 14:30~16:30

センター入口で受付後、担当教員から説明・案内あり

プラズマ研究センター

8月11日 14:30~16:30

世界最大の直線型プラズマ実験装置“GAMMA10/PDX”

研究基盤総合センター

8月11日 14:30~16:30

応用加速器部門の大型イオンビーム実験装置(600万及び100万ボルト静電加速器)、分析部門のプラズマ発光分光分析装置などの様々な化学分析装置

附属図書館

期間中 9:00~18:00

体育・芸術図書館、医学図書館、図書館情報学図書館も見学可

計算科学研究センター

期間中 14:30~16:30

歴代のスーパーコンピュータの展示フロア

筑波大学ギャラリー

期間中 9:00~17:00

筑波大学アールスペース

期間中 9:00~17:00

学生宿舎(グローバルヴィレッジ)

期間中 14:30~16:30

一般的な学生宿舎の居室及びグローバルヴィレッジの居住ユニット及び共用施設を公開



【お問い合わせ】

教育推進部入試課 029-853-6007

受付時間/9:00~12:00、13:15~17:00

(土日祝日及び休業日を除く)

E-mail gm.nyusika@un.tsukuba.ac.jp

モバイルサイト



キャンパスツアー、好評実施中!



高校生など10~80人程度のグループを対象に、筑波キャンパスを紹介するツアーを行っています。東京ドーム約55個分の広大な敷地や研究施設を案内し、本学の雰囲気を味わっていただくとともに、学びへの期待を高める体験ができます。

ツアーは、以下の主なメニューから時期や人数などに応じて個別にアレンジします。

- 1) 大学概要説明
- 2) 施設見学
- 3) ミニ講義(高校2年生以上)
- 4) セグウェイ体験乗車(16歳以上)
- 5) 学生食堂での昼食

スケジュールの一例

9:45 バスで大学に到着

10:00~ 大学概要説明

教室で大学紹介DVDを視聴。
同行の学生が質問に答えます

10:35~ ミニ講義

文系、理系に分かれて、教員が特別授業。
講義室で大学生気分を味わえます

11:50~ 昼食・中央図書館自由見学

13:35~ 施設見学

特色ある研究施設を見学。
研究の一端に触れます

14:30 ツアー終了



キャンパスツアー窓口

筑波大学広報室(企画)

TEL:029-853-2064, 2063

FAX:029-853-2014

本学HP(<http://www.tsukuba.ac.jp/tour-top>)から、学校単位でお申込みください。

筑波大学公式オリジナルグッズに新商品が登場

本学公式オリジナルグッズのラインナップに、新しい仲間が加わりました。



オリジナルギフトマグカップ

2色展開のシンプルなマグカップ。ギフトにもぴったりです。



合格きつぷ付き合格祈願お守りストラップ

志望学類を記入した合格きつぷを入れて、自分だけのお守りが作れます。

【お問い合わせ】 UTshop かりのは 029-858-1112

【オンラインストア】 <https://www.ut-shop.jp/>

筑波大学科学技術週間 キッズ・ユニバーシティ



今年の注目は水生昆虫でした

4月21日(土)、毎年恒例の科学技術週間のイベント「筑波大学 キッズ・ユニバーシティ」を開催しました。「一日筑波大生になって科学の面白さや大学の魅力を体験してもらう」ために企画された、特別授業、体験教室、工作教室、観察ツアーなどが盛りだくさん。7回目になる今年は天候にも恵まれ、親子連れなど550名あまりが訪れました。

特別授業

キッズ・ユニバーシティの目玉は、階段教室での大学教員による特別授業です。

●富士山vs筑波山 どちらが好き？ 山のカタチを科学する

生命環境系の池田敦准教授の専門は氷河の地形で、富士山頂の凍土も研究しています。授業では、富士山と筑波山のカタチはなぜあんなに違うのかを、コンニャクを使った実験映像も交えて話しました。ただ、受講者は、富士山



池田先生に鋭い質問をするキッズ

の噴火の可能性の方に、より関心があるようでした。

●AIって？

AI(人工知能)は本当に将来、人間の仕事を奪ってしまうのでしょうか。その心配は、システム情報系の鈴木健嗣教授の授業で消えたはず。AIにできることと人間にしかできないことを例示しながら、AIへの期待と限界を語りました。特に、AIは人間のウソ笑いを、表情のわずかな特徴から正確に見抜けるという話には、みんなびっくりでした。

体験教室

●昆虫ハカセと行く(春のむしムシ探検隊)

人気プログラムの一つ「昆虫ハカセと行く(春のむしムシ探検隊)」。生命環境系助教の横井智之隊長と水生昆虫やクモ好きの学生隊員に率いられて、大学構内の昆虫観察をしました。



AIなんて、もう怖くない!

●筑波大学地底探検ツアー

春日エリアを除く筑波大学構内のすべての建物をつなぐ全長約14kmの巨大な地下共同溝。大学関係者でさえ、足を踏み入れた人はまれです。事前登録はすぐに満員となり、延べ92名の参加者は、この地下通路を巡る貴重な体験を楽しみました。

●タッチプールで海の生き物にさわって、生き物を学ぼう!

今年も下田臨海実験センターから、海の生き物がやってきました。特設プールには小型のドチザメ、イセエビ、ヒトデ、ヤドカリ、ナマコ、ウニなどが放され、自由にタッチできます。顕微鏡を使って、肉眼では見えにくい小さな生物も観察しました。



大きなナマコだつてへっちゃら

みどり散歩

世界のみんで植物の大切さを考えるための「国際植物の日(5月18日)」を記念したイベントが世界各地で開催されます。その一環として、生命環境系の上條隆志教授が案内する「構内植物ガイドツアー(みどり散歩)」などが、キッズ・ユニバーシティにあわせて実施されました。

RESEARCH TOPICS

天敵のにおいは学習不要——本能的な恐怖を引き起こす新規においセンサーの発見

飼育下のマウスは、天敵であるキツネのにおいを嗅ぐと、怖がって身をすくめる「すくみ行動」をします。キツネには一度も出会ったことがないので、これは、学習行動ではなく、生得的、本能的な行動です。

しかし、さまざまなにおいのうち、恐怖を喚起する特定のにおいに対してだけ、特別な反応をする仕組みはわかっていませんでした。国際統合

睡眠医科学研究機構のリユウ・チンファ教授を中心とする国際研究グループが、その謎に迫りました。

研究グループは、キツネのにおいを嗅いでもすくみ行動をしないマウスの突然変異系統を見つけ、Fearless(怖いもの知らず)家系と名付けました。この家系では、刺激性化学物質などのセンサーである遺伝子Trpa1が働いていないことを

発見しました。このセンサーは、たとえばワサビのつんとくる刺激に反応します。

この発見の鍵は、Trpa1センサーへの刺激を伝えるのが、嗅覚神経ではないことです。一般においとは別ルートで、刺激が脳に伝わっていたのです。これは、従来の考え方を覆すものです。

キツネなどの天敵のにおいを伝えるのは、三叉神経節という神経でした。これは、顔の痛みなど(体性感覚)を伝える神経です。前述のワサビのつんとくる刺激も、いくなれば痛みに似た感覚です。痛みを避ける行動は、反射的なもので、学習する必要はありません。進化の過程で、この刺激を感じると「すくみ行動」をとって気配を消すようになった個体の方が、生存上有利だったので、今後、恐怖のような本能行動の仕組みに関する理解がさらに深まりそうです。



リユウ・チンファ教授(左から二人目)の研究チーム

窒素の比率が教えてくれる太陽系の秘密——謎を解く鍵は太陽が生まれる前にあった

窒素の質量数は、通常は14です(窒素14)。しかし、質量数15の同位体「窒素15」もあります。太陽系全体の窒素15と窒素14の存在比は1:440です。

ただし、この比率は一様ではありません。窒素15の存在比は、太陽系誕生と同時に作られた固体物質である隕石や彗星においては高くなっている一方で、恒星や惑星の元となる星間分子雲では低いことが知られています。

計算科学研究センターの古家健次助教は、東京大学との共同研究により、このような窒素同位体の存在比異常が生じた仕組みを、希薄な星間ガスから密度の高い分子雲が形成される際に起こる化学反応のネットワークモデルを使った数値計算によって解明しました。

恒星や惑星の元となる星間分子雲は、星間ガスと星間塵(固体微粒子)から成っています。

これらが何100万年もの時間かけてゆっくりと収縮し、46億年前、太陽系が生まれました。

このプロセスにおいて、分子雲にある窒素分子N₂は、紫外線を受けると窒素原子に分解されます。このとき、窒素15の方が不安定なため、より多く分解されます。同時に、星間塵の表面ではアンモニア(NH₃)などの氷が生成され、その中に分解された窒素原子が取り込まれます。この氷がやがて

惑星の材料となりうる固体物質を形成していきます。このような反応が複合的に進む結果として、窒素15が、固体物質には多く、星間ガスには少なく含まれるという存在比異常が起こるわけです。

太陽系の歴史、宇宙の歴史の一端が、窒素という元素を通して見えてきました。「われわれは星屑でできている」という天文学者カール・セーガン博士の言葉が思い出されます。



古家健次助教

宿舍のお祭り「やどかり祭」に6,200人が来場

つくばキャンパスにある学生宿舎には、毎年、新入生の約半分が入居します。1975年、娯楽のほとんどなかったつくばで、親しくなった寮生らが「七夕祭り」と称して模擬店などを出したのが、筑波大学宿舍祭「やどかり祭」の始まりです。

44回目となる今年は、5月25日(前夜祭)、26日(本祭)の2日間とも天候に恵まれ、平砂学生宿舎地区をメイン会場として開催されました。近隣から多くの家族連れや子どもたちも訪れ、延べ6,200人を超える来場者がありました。

前夜祭では、野外ライブ、太鼓演奏、トーチトワリング、火文字などが披露され、本祭のメインステージでは、津軽三味線倶楽部無弦塾、応援部WINSが登場して会場を盛り上げました。そのほか、御輿練り歩きやゆかたコンテストなど、個性豊かなパフォーマンスが繰り広げられました。

写真提供：筑波大学新聞



グループの個性が際立つ手作り神輿と衣装



応援部WINS



パフォーマンスで競うゆかたコンテスト

国際スポーツボランティア育成プログラムを開催します

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会まで700日あまりとなり、まもなく、ボランティアの募集が始まります。本学では、オリンピック・パラリンピック教育の実績を生かし、国際スポーツ大会のボランティアに必要とされる教養や技能を学べる、「国際スポーツボランティア育成プログラム」を開催します。

プログラムはそれぞれ2日間の日程で、大学生を中心に、高校生や一般市民も対象としています。グローバルマナーやオリンピック精神に関する講義のほか、オリンピック組織委員会や、ボランティアアドバイザー会議の方から、

東京2020に向けた取り組みの説明、ボランティアに求められることなどを、具体的に聞くことができます。また、「車椅子に座る障害者へのサポート方法」「視覚障害者へのガイド方法」などの実技、「シッティングバレー」「ブラインドサッカー」といったパラ・スポーツを体験します。

2日間の全講義を受講した方には、修了証が授与され、今後の様々な国際スポーツ大会におけるボランティア申込みの際のアピールとなるほか、研修履歴として活用できます。



開催日程

■8月4日(土)、5日(日)

会場：本学東京キャンパス、本学附属中等学校

■8月26日(日)、9月2日(日)

会場：本学附属中等学校、本学附属小学校

詳しくは、<https://opop.tsukuba.ac.jp/>(筑波大学オリンピック・パラリンピック総合推進室)

総合推進室)

世界のトビラ

筑波大学は、海外の教育研究機関と連携し、学生・教職員の受け入れや派遣、交流イベントの開催など、国際的にも「開かれた大学」を目指して、さまざまな活動を展開しています。

研究交流を支える

筑波大学は、研究や学問のあらゆるボーダーを超えて行くことを目指しています。現地での活動を続けるなかで、その地域文化や社会に応じた、臨機応変な対応が必要なことも多々ありますが、そんなときこそ、現地オフィスが活躍します。

タシケントオフィス(ウズベキスタン共和国)は、2007年に本学2番目の海外拠点として開設されました。中央アジアにおける日本語・日本文化研究の中心であるタシケント国立東洋学大学にオフィスを構え、中央アジア諸国の大学・研究機関とネットワークを構築しています。ここでの研究・交流活動を支えるため、オフィスでは現地に渡航する教職員のビザや宿泊手配に関するサポート、学会等の会場手配や広報活動、留学生や卒業生ネットワーク構築の支援等を行っています。

3月16、17日に開催された、国際シンポジウム「Intercultural Dialogue and Translation/Adaptation:文化と対話と翻訳・翻案」においても、同オフィスの支援機能が発揮されました。

これまで、資金やビザの関係で、日本語・日本文化を専門とする中央アジアの研究者同士が交流する機会は限られていましたが、今回は現地で開催されるということもあって、周辺各国から多数の研究者や学生が参加しました。多言語地域であることを考慮して、英語、日本語、ウズベク語、ロシア語の4ヶ国語に対応することになり、本学ウズベキスタン同窓会を通じて、多言語に対応できる人材を集め、翻訳作業や通訳、論文集の編集で協力を得ることができました。

また、シンポジウム直前に、日本からウズベキスタンへの渡航ビザの要件が変更になりましたが、開設から10年あまりの間に培った情報収集力や公的機関との信頼関係を生かし、参加者の入国から滞在、帰国までの手続きをトラブルなく進めることができました。



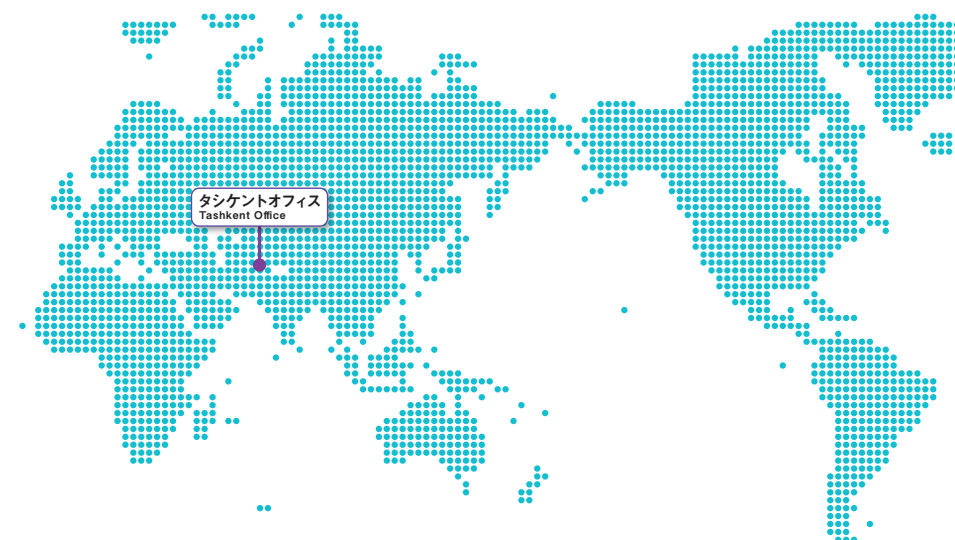
シンポジウム参加者のみなさん

国際シンポジウム

「Intercultural Dialogue and Translation/Adaptation ; 文化と対話と翻訳・翻案」

中央アジア地区4大学と本学を含めた国内5大学から、教員や学生150人が参加し、翻訳・翻案の対象となるテキストが異文化に何を伝え、対話や新たな文化創成にどのように関わっているかについて、2日間に渡って言語学、歴史学な

ど幅広い視点から研究発表と討論が行われました。これまでで交流の少なかった中央アジアの研究者と議論でき、意義深いシンポジウムとなりました。(タシケントオフィス責任者 人文社会系 明石純一准教授)



ツクバで ツナガる リレー メッセージ

5000人を超す教職員がいる本学。

それぞれが切り取るツクバの「今」を、8本のバトンでつなげていきます。



珍しいキノコも採れます

人文社会エリア支援室
笹谷衣代さん

BATON
01

職場の同期と、野外採集したものを料理して食べる、という遊びをしています。今年は同期の道案内により(感謝!)、念願のア

ミガサタケを採集できました。このキノコ、山奥の神秘的なところにひっそり生えているのかと思いきや、ある程度、攪乱された場所を好むそうで、たまに道端に生えている時もあります。海外ではモレルまたはモリーユと呼ばれ、そこそこいいお値段で取引されるとか。開発が進んでいる筑波地区ですが、こんな遊びもできるので、本当に住みやすい街だなあと日々感じています。

NEXT
今回は、生命環境エリア支援室の高谷創さんです。「頼りになる同期です。スポーツ・洋楽・山菜などなど、幅広いジャンルが守備範囲の、すごい方です」

茨城県は元気のある地元企業、民間団体がたくさんあります。もう15年以上前になりますが私が参加していたプロジェクトの一つに地域の技術を活かす大型国家プロジェクトがありました。その名は「地域結集型共同研究型事業」。国内で2番目に大きい湖である霞ヶ浦の環境改善を目的として産・官・学が結集し、私は湖底の土壌を浄化するグループに参加し、研究者や霞ヶ浦の漁師さんと一緒にプロジェクトを推進しました。私の授業では閉鎖性水域浄化の重要性や困難な点について自身の経験を含めて解説しています。

漁師さんも研究仲間

BATON
05

生命環境系
野村名可男さん



筆者最後列右から9番目

NEXT
今回は、第二エリア受付の堂嶋ゆうかさんです。「大学では受付業務を担当する心強いスタッフですが、実は美しい声をお持ちで、CDリリースや公開ライブでご活躍されています」

何事もチャレンジ!!

筑波大学東京キャンパスの国際経営プロフェッショナル専攻に奉職して約1年が経ちました。英語環境の中で志の高い社会人MBA学生と一緒に、日々、経営に関する研究教育に動んでいます。何事もチャレンジが大事だと思います。最近、昔からの夢であった空手の黒帯を息子と一緒に取得しました。公私共にまだまだやりたいことはたくさんあり、これからもチャレンジを続けていきます。筑波大学には皆さんの夢をかなえるためのプラットフォームがあると強く感じています。ぜひ筑波という場にどんどん集ってもらえれば嬉しいです。

BATON
02

ビジネスサイエンス系
平井孝志さん



筆者右

NEXT
今回は、ビジネスサイエンス系の朱藝さんです。「昨年までは筑波地区で、今年からは東京キャンパスで教鞭をとられている素晴らしい研究者・教育者です!!」



BATON
06

システム情報エリア支援室
松原 悠さん

筑波山だけじゃない

「つくばの山は筑波山」と思っていました。スポーツマンの上司から「宝篋山(ほうきょうさん)でトレイルランしない?」と誘われ、聞けば筑波山よりもなだらかで低い山とのこと。新緑を見ながら適度な運動なんて素敵じゃないか、と付いていったら、岩や小川や木の根っこが待ち構える斜面を黙々と駆け上がっていくことに。なんとか食らいつき、すぐに足が上がりなくなるとは休むことを繰り返し、1時間かけてようやく山頂に。険しい表情で思い出の一枚。この後の駆け下りは最高に気持ち良かった!下だけの山があればいいのになあ。

NEXT
今回は、体育系のラクワールランディープさんです。「母国の体育の発展のために研究する留学生たちの志に応えて、熱く一心に指導されている心温かい先生です」



筆者左端

BATON
03

附属病院看護部
大内 玲さん

現在の私の役割は二つあります。一つ目は、看護師としてICUに入室する重症患者のケアを行うこと、二つ目は研究者として世界標準のクリティカルケア看護を実践するための方法を科学的なアプローチで探索することです。つくばは、他職種とのつながり、他分野とのつながりにも恵まれています。つまり、色々なことにチャレンジできる環境があります。人と人の出会いを大切に、色々な助けを得ながら、与えられた役割を遂行していきたいと考えています。いつでも仲間を募集しています。興味をお持ちの方はぜひ一緒に活動しましょう。

NEXT
今回は、附属病院リハビリテーション部の丸山剛さんです。「共に急性期の患者ケアを支えてくれる理学療法士です。フレキシブルな対応力で絶大な信頼が置かれています」

今年の6月より、本学の海外拠点の1つであるドイツのボンオフィスに駐在員として2年間派遣されることになりました。旅行で数回海外に行ったことはあるものの留学は未経験、ドイツ語も未習得のため、現地での生活に不安は多々ありますが、それ以上に現地での仕事・生活が楽しみでもあります。ドイツ内の学術機関との交流促進、留学生のリクルート活動などやりがいのある仕事が多岐にわたり、駐在員として責任をもって仕事に励みたいと思っています。ドイツへお越しの際は、ボンオフィスへお気軽にお立ち寄りください!



NEXT
今回は、国際統合睡眠医学科学研究機構の征矢晋吾さんです。「私の兄です。研究職の兄の存在は、事務職員の私にとって刺激になります。また研究の話聞かせてください」

クリティカルケアを追求

9年前に筑波大学に来てから、国際地域研究専攻・国際日本研究専攻で、中央アジアを中心とする旧ソ連諸国の留学生教育に携わってきました。修了生たちはすでに60名以上となり、旧ソ連諸国やアメリカ、イギリス、オーストラリアなど世界各地で活躍しています。近年日本との交流が盛んになり、「乙嫁語り」ブームなどで私たちにも身近になってきた中央アジア。彼らと日本で会う機会も多くなりました。修了生たちと共通の知人の話題が出るたびに、ネットワークが広がってきたことを実感できます。これからも彼らとともに歩んでいきたいと思っています。

広がる中央アジアの輪



筆者左端

NEXT
今回は、人文社会エリア支援室の杉本久美子さんです。「中央アジアやラテンアメリカなど世界各地にはばたく学生さんたちを、明るくサポートして下さる杉本さん。海外生活経験も豊富で、いつも興味深いお話を聞かせていただいています」

BATON
08

数理物質系
伊藤雅英さん



筆者左から5番目

3年間、数理物質系の系長を務めました。その間サポートしてくれたのが、支援室や技術室の方々でした。教員の視点では気づかない点を気づかせてくれたり、適宜、アドバイスをもらったり、何より、組織に対する様々なデータを提供してもらったことで、職務を全うすることができました。また、通常業務を超えて特に顕著な業績をあげた事務職員や技術職員に対して数理物質系長賞を設けて、毎年表彰してきました。写真は第一回の受賞者です。

組織を支える大切な力

NEXT
今回は、人事課の山口智紀露さんです。「昨年度まで部局の総務人事担当として支えてくれました」

ボンオフィスで会いましょう

BATON
07

国際室
征矢南海子さん

本学のアイデンティティを基にした筑波ブランドを、社会や関係ステークホルダーと共創するため、ブランドの「アイデンティティ」、「コンセプト」を確立し、「IMAGINE THE FUTURE.」のスローガンとともに使用しています。

ブランドアイデンティティ

筑波大学は未来を構想し、その実現に挑むフロントランナーです。

ブランドコンセプト

筑波大学は開かれた大学、学際融合・国際化への挑戦を建学の理念とする、未来構想大学と自らを位置づけます。文系・理系から体育、芸術に及ぶ学問を探究し、グローバル・リーダーの育成を目指す、真の意味での総合大学=Universityです。最先端研究拠点TSUKUBAの中核として、人類が共存共栄する世界の実現に向かって行動します。

配色は、本学の準基本色である「つばブルー」を基本とします。また、他には基本色である「つば紫」や、金、銀、黒でも表現できます。

IMAGINE THE FUTURE.



1974年制定



2007年制定

筑波大学校章の変遷

“明治36年に今のお茶の水から大塚の現在地に学校が移転したが、これを機としたのだろう…中略。では桐葉が何故本学の紋章となったのであろうか。今それを明らかにする文献はないが、大先輩でもある諸橋轍次先生（明治41年卒業）は、「教育尊重の意味にて宮内省より特別に許可、但宮中の五七の華を避けて三五の桐と致すとか聞き覚え居り」と述べておられる”

『桐葉 12』

東京教育大学学生部 1971

4月下旬から5月にかけて、本部棟や中央図書館の辺りで淡い紫の花を咲かせる桐は、本学の校章として馴染み深い樹木です。

1974年、筑波大学開学当初に、前身校である東京教育大学の伝統を大切にしようと、「五三の桐」が校章に定められました。しかし、細かな決まりがなく、さまざまなバージョンが存在していたことから、本学創立25周年記念事業の一環として、筑波大学CI(Corporate Identity)計画ワーキンググループが発足し、1998年の5月に、新たな校章のデザインと表現基準が提案されました。

しかし、北原保雄学長(当時)を筆頭とする評議会で、校章を変更するというは重大なことなので、まずは広く学内外に定着させようということになり、その後、視覚表現システムマニュアルを公表し、各種印刷物や学内サインボード、ホームページ等で積極的に活用され、統一デザインの「桐」が広く認知されていきました。

この提案から9年後の2007年6月、現在の校章が正式に「筑波大学校章等規則」に盛り込まれました。

Events Calendar

7

July

- 2日(月)・生存ダイナミクス研究センターキックオフシンポジウム
- 14日(土)・帰国生徒特別入試〔10月入学〕
・学群編入学試験(～15日)
- 15日(日)・City Chat Café [LALAガーデンつくば]
- 28日(土)・夏休み自由研究お助け隊2018

8

August

- 1日(水)・春ABCモジュール期末試験(～7日)
- 4日(土)・受験生のための筑波大学説明会(～5日、11日)
・第2回2020東京オリンピック・パラリンピックボランティア育成セミナー[東京キャンパス]
(～5日：附属中学校・高等学校桐陰会館)
【第3回 8/26：附属中学校・高等学校桐陰会館、9/2：附属小学校講堂】
【第4回 9/23：神田外語学院東京キャンパス講堂、9/30：附属中学校・高等学校桐陰会館】
- 7日(火)・春学期授業終了
- 8日(水)・期末試験予備日
- 9日(木)・夏季休業(～9/30)
- 17日(金)・化学グランプリ2018(～18日)
- 27日(月)・ちょこっと探究クラブ[東京キャンパス]

9

September

- 16日(日)・City Chat Café [LALAガーデンつくば]
- 20日(木)・TSUKUBA GLOBAL SCIENCE WEEK 2018 —Driving Sustainable Development— (～22日) [つくば国際会議場]
- 25日(火)・卒業式・大学院学位記授与式
- 27日(木)・平成30年度T-ACT上半期活動報告会[筑波大学サテライトオフィス]
- 28日(金)・秋学期入学式
- 29日(土)・INNOVATION WORLD FESTA 2018(～30日) [六本木ヒルズ]



筑波大学

University of Tsukuba



TSUKU COMM 【ツクコム】(筑波大学広報誌) vol.40
平成30年7月発行 編集・発行：筑波大学広報室
〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1 電話：029-853-2063
E-mail: kohositu@un.tsukuba.ac.jp URL: www.tsukuba.ac.jp
©2018筑波大学(本誌記事の無断転載を禁じます)